

はじめに

みなさん、こんにちは。著者の^{まつざわきよし}松澤喜好です。本書『^{えいごのみみ}英語耳ボイトレ 発声術を学べば一発で通じる、聞き取れる』の目的は、日本人の英語学習者がもっとも苦手とする「リスニングと発音」の力を飛躍的に高めるための、必要十分な、なおかつやって楽しいレッスンを提供することにあります。

学校の試験等で流れるスローな英会話なら聞き取れるのに、ネイティブに自然なスピードで話されると途端にお手上げになる。TOEIC で満点近くを取っても、英検で1級をとっても、海外に住んでみても、なぜか英語の聴き取りにいまだに苦労している。とにかく会話が弾まない、ネイティブが自分と話す時にストレスを感じているようだ——こんな方々への**特効薬**として、この本のレッスンは構成されています。英語学習のより早い段階で本書のレッスンをするほど、その後の効果は高まり、英会話学習が楽になります。読者対象は、**初心者、中学生から中上級者 (TOEIC 900 点以上)、英語圏への留学生／駐在員まで**です。

到達点は、**英米人と自然に会話ができるレベル、CNNや洋画を字幕無しで日本語と変わらず自然に聞き取れるレベル＝「英語耳」**の獲得です（もちろん、学校で習う程度の英文法力や単語力は別途必要ですが）。初心者の方も、本書ですぐにレッスンを始めてください。

なぜリスニングがいつまで経っても 100 %にならないのでしょうか？

ズバリ言いましょう。それは、第一に、「**英語の子音・母音 43 音の正しい音を知らない**」ためです。あなたは but と bat、heart と hurt、ear と year を区別して発音、リスニングできますか？ こうした音を発音し分けられる口＝聞き分けられる耳の能力が無いのならば、英語のリスニング力はかなり低いレベルで頭打ちになる、ネイティブの会話速度にはついていけない、というのが私の長年の研究の結論です。

そして第二には、「**“音節”単位で単語が脳に記憶されていない**」ためです。英語の「音節」とは、「子音＋母音＋子音」のように、英米人が単語の発

音のもとになっていると感じている音のかたまりです。日本語の場合は「カナ」が1つの音節です。ネイティブの脳には単語が音節単位で整理されており、特定の音節を聞いた時点で、単語のしぼり込みが行なわれます。たとえば、[stri:]（**発音記号に関しては p.116～参照**）という音がアクセント付きで聞こえたら、発話者の使用単語は street（通り）か stream（流れ）か streak（光線）の3つにほぼしぼられます。こういった感覚がないと、英会話の高速な理解は不可能なのです。英語の音節のパターンの記憶が弱いと、ネイティブの会話がいつまでも高速には把握できません。もし、あなたが音節の単位を気にせず発音しているなら、あなたが「今日映画を見に行ったら友達と会った」と言ったつもりでも、ネイティブは「キョ、ウエ、イガヲミ、ニイツ、タラトモ、ダ、チトアッ、タ」と区切られて発音されているように感じて、強いストレスを感じます。**あなたが聴き取る際も、理解が進まないのは、音節をトリガーにしてリアルタイムで英文を把握できないから**なのです。そのためには、英語の音節の感覚が身につくまで徹底的に発音練習する必要があります。

上記の**第一の理由への対策**としては、拙著『^{せつちよ}英語耳』と『^{たんごみみ}単語耳 理論編＋実践編 Lv.1』で、**第二の理由への対策**としては『単語耳 実践編 Lv.2』で徹底的に解説しました（音節は、末尾の子音部分を除いた部分で分類すると500種類強に整理できます。『単語耳 実践編 Lv.2』では大学入試レベルの2000語を、その分類にそって音読記憶できます）。そして、『単語耳 実践編 Lv.3』では、その音節の分類にさらに語源のイメージをプラスして、上級2500語を強く脳にすり込んでもらうという充実したレッスンを提供してきました。『単語耳』（全4巻／2008年現在は第3巻の実践編 Lv.3まで刊行済み）ではネイティブ並の単語力——洋書を読む際の中核となる、厳選された8000語——を、音節と語源に関する感覚をともなって一挙に獲得できるわけです。その結果、実際に、「リスニングにおいて大きな効果があった」「単語力の限界を突破できた」という声が、中学生から上級者、海外駐在者の方々から多数寄せられており、著者として非常にうれしく思っています。

しかし、それでも「それが難しい」という方は存在します。そうした方々を、なんとか救いたい。なんとか違ったアプローチで、より進化した楽しいレッスンを提供できないものか……私はそのために、**英米人相手にボイストレーニングを指導している発音のプロ中のプロであるクレア・オコナー氏、日本人相手にボイストレーニングを長年している第一人者、福島英^{えい}氏の門を叩きました。**そして彼らと議論をくり返し、試行錯誤を続けて来ました。

「より楽しく、挫折^{させつ}せずにレッスンしてもらうには、どうすべきか」

「真の英語耳を作り上げる発音練習の際には、口先や舌^{きた}を鍛えるだけでは不十分な人もいるのではないか」

「英語の子音・母音の音、音節単位での発音の記憶を作るには、どんなボイストレーニング（ボイトレ）が有効か」等々——。

その成果として、今回、非常に自信の持てる斬新なレッスンをくみ上げることができました。本書を、ついに世に送り出せることを、私は誇りに思っています。

付録 CD の音声レッスンは、私のこれまでの経験とノウハウを全面的に取り入れて、クレア氏が考案しました。日本人がもっとも苦手とする①「子音・母音の発音」の仕分けを可能にする、②「音節」の極意を体得できる、実にリズムカルで楽しいレッスンです。そしてこのレッスンにより、あなたは同時に、③強くひびく、より通じやすい発声法まで体得できるようになっています。

「日本人の英語が通じないのは、なるべく息を吐かないようにして、ぼそぼそしゃべる人が多いからだ」というのが福島氏の持論です。**英米人と日本人とでは、実は肺や体の筋肉を使った息の吐き方に決定的な差があり、それがコミュニケーション不全の一因となっているのです。**これが、クレア氏、福島氏との議論の中でよりはっきりしてきた、「リスニングがいつまで経っても100%にならない」**第三の理由**です。

ネイティヴが聞きやすい、強くひびく発音を身につけるには、ボイストレー

ニングのノウハウが有効です。アナウンサーや演劇・映画の俳優や声優などが行なう、いわゆる「ボイトレ（ヴォイトレ）」ですね。

今回の付録 CD では、自宅で、一人で英語のボイトレレッスンが可能です。女声部分をクレア氏（米国人女性）が、男声部分を歌手のブラッド・ホームズ氏（米国人男性）が担当して発音していますので、男性でも女性でも違和感なく、近年世界標準になったと言えるアメリカ式発音のレッスンができます。

今回の付録 CD では、**40 分弱**というコンパクトな長さの収録時間内に必須の練習を凝縮しました。しかしその内容たるや、本格的なものです。英語のナレーターを目指す方や、歌手や俳優の方の練習にも適しています。

発音に即したリズム伴奏も入れてありますので、実に効果的に英語の「音節」の 1 拍感覚が身につく練習ができるでしょう。

また、この CD について発音練習すると、「音節」の極意が身に付くのと同時に、日本人が特に苦手とする **[s] と [j] の使い分け、[r] と [l] の使い分けなどの発音上の弱点も克服**できます。

クレア氏がこの CD 用に特別に作詞してくれた、[s] [j] の練習用楽曲「Sheila Sells Seashells」、[r] の発音練習がたっぷりできる「Dream Party」、[l] [r] の発音練習用の「Long Distance Love Affair」、cut, cat, cot などに含まれる複数の「ア」系母音の練習ができる「Better Butter Song」など、リズム伴奏つきで楽しく練習できるレッスンばかりです。ぜひ、無意識のうちになめらかに舌が回るようになるまで、くり返し音読練習してください。

本書の CD で練習して、あなたの発音が英語の発音に適したよくひびく声になると、あなたの声質そのものが劇的に変わります。英語の発音だけでなく日本語を話すときにもひびきのある魅力的な声に変身するのです。あなたの周りの人も変化に気づくはずです。そして**自分の発音が変わるにつれて、英語の聞こえ方も必ず変化してきます。**まさに一石二鳥なのです。

正しいボイトレによる発声練習は、さらに**健康にも良い**とわかっています。深呼吸が健康に良いからです。また、声を出すことがストレス解消になり、

人の会話を理解する“脳”力も向上させます（脳機能学者 久保田競 京都大学名誉教授 著『バカはなおせる 脳を鍛える習慣、悪くする習慣』参照）。

英語の発音がネイティブ並にみがかれ、良い声の持ち主になり、健康にもなって脳も発達するという“一石四鳥”の効果があるのが、本書の付録 CD なのです。

付録 CD の今までとは一線を画する楽しさは、一聴していただければおわかりになるはずです。『英語耳』『単語耳』のいささかスパルタ式だったレッスンについて来られなかった方も、すでにそれで発音をある程度マスターしている方も、本書のレッスンをぜひ日常の習慣に取り入れていただきたいと思います。

なお、本書の執筆は、主に理論編第 2 部を福島英氏が、レッスンのための英文とその解説の執筆をクレア・オコナー氏が、その他を私、松澤喜好が担当しています。



松澤喜好氏と本書を共同執筆するにあたって（福島）

みなさん、はじめまして。プレスヴォイストレーニング研究所を主宰している福島英えいです。

英語の本の企画という、15 年くらい前に持ち込まれ、ずっと棚上げだったのを思い出します。私がちょうど海外を 50 カ国くらいまわった後のことです。その時、出版社からは、“学校の正しい英語”でなく“パワフルに伝わる英語”を——（英語圏だけでなく）世界中で通じる英語を体得する内容を希望されました。要は「発声力」が問題だったわけです。

その頃は、私の仕事には通訳がついていました。でも、通訳の英語よりも、私の英語のほうがよく通じることもあったのです。そのコツを一言でいうと、“息で強く吐き捨てる”ことでした。

外国語教育にボイストレーニングのノウハウを活かそうと考えたのは、仕事柄、英語や多くの言語の歌を聞いて指導してきた私のボイトレに、外国人との仕事の経験や、外国語の学習法が多くのヒントを与えてくれたからです。特に

発音、リズムの本は、欠かさず入手してきました。語学学習書に音声 CD が付録としてつくのが一般化してからは、なおさらいろいろなことが参考になりました。

そんな中で、わかりやすくて完成度が高く、その上、私の考えていること——話したり、行なったりしてきたことに一番近かったのが、松澤喜好氏の『英語耳』の内容でした。さらに驚いたことには、氏の続編『英語耳ドリル』では、私の研究所でよく歌われていた曲のベスト版に近い選曲がなされていました（1950年代～1980年代の曲ばかりなので、私や私の研究生たちになじみ深い楽曲ばかりだったことありますが、松澤氏が「英語耳」作りのために選んだ楽曲と、我々がボイトレのために選んだ楽曲が一致していたことは、両者のプログラムの正しさを示してはいないでしょうか。ちなみに、いわゆるラジオ世代の耳のほうが、今のビジュアル世代よりも音について鋭いのは、当然かもしれません）。

松澤喜好氏が、英語の歌をそっくりまねて歌うことで英語耳の基礎を形作られた、というエピソードを読んで、私もかつて学生時代、「百万人の英語」のポップス曲を短波で聞きながら、歌詞をテキストで眺めて、すごくうれしい気持ちだったことを思い出しました。それゆえ、ラジオから直接、英語を書きとる努力からされていた松澤氏とは、声を耳で聴き、詞よりも声質に感動していたという原点も共有できているようです。

ラジオを聴いて「一緒に歌いたい！」となったとき、楽譜や歌詞があっても、発音がわからないと難しいのは確かですが、鋭い耳としっかりとした発声力があれば、何とかなるものです。この声の魅力という側面にスポットをあて、声のトレーニングから「英語耳」を作る道筋を示したのが、本書『英語耳ボイトレ』です。

英語の発音・リスニングの習得は「ボイトレーニングから始めるべき」という、「英会話学習の新時代」の到来を願って、著者一同、みなさまに本書を自信をもってお届けします。今すぐレッスンを始めましょう！